

SBAR を用いたシミュレーション演習における学生の学び

岡山県立大学保健福祉学部看護学科

犬飼智子 名越恵美

【目的】SBAR を用いたシミュレーション演習の学生の学びを明らかにし、今後の課題について検討する。【方法】1)対象者：看護学科3年生39名。2)演習の概要：胃がんの術後3日目のシナリオとし、学生はシミュレータを用いて情報収集を行い、結果を看護師にSBARを用いて報告する。3)演習目標：①全身状態の観察、バイタルサインの測定とアセスメントができる、②疼痛時の対処方法が分かる、③現在の問題点と今後予測されることを15分以内に判断し報告できる、とした。4)データ分析：演習の気づきや学びについての記録を基に質的分析を行った。【結果】学生の学びは、＜効率的な情報収集・アセスメント・報告＞、＜患者の状態・術後経過の理解＞、＜関連する情報・問題点の整理＞、＜重要な情報の選別＞、＜相手への分かりやすさを意識した伝え方＞、＜患者へのケアにつながる提案＞、＜相手への伝達の困難感＞、＜アセスメントの根拠の明確化＞の8カテゴリーであった。

キーワード：SBAR、報告、シミュレーション、医療安全、看護基礎教育

I. はじめに

近年、医療者が安心して学び、患者の安全も守るという観点から、シミュレーション教育の導入が急速に進んでいる。看護基礎教育においてシミュレーション教育は、「フィジカルアセスメント技能の向上のために様々な症状や徴候を再現するシミュレータ等の有効な活用、および各種の看護技術を実際に近い状態で適用できるようにするために臨床場を疑似体験できるような用具や環境の整備は、学生の実践能力を向上させる有用な方策である」（基礎看護教育の充実に関する検討会報告書, 2007）と評価がされている。

また、医療の現場で発生しているインシデント・アクシデント事例にはコミュニケーションエラーに関するものは少なくなく、職種間のコミュニケーション改善は医療安全推進における課題の1つであるといわれている。正確な情報の伝達、情報共有、および共通認識が重要であり、患者、家族や職員間のコミュニケーションエラーを防止することが望まれる（斉藤他, 2016）。臨地実習においても、学生は実習開始時に、受け持ち患者

の担当看護師に看護計画を発表し、看護師から内容や留意点等の指導を受けたり、患者の状態やケアの実施後の報告をしたり、相互のコミュニケーションが重要となる。しかし、看護学生の情報の伝達力の未熟さや共通認識が不十分なことが多く、看護師とのやりとりのなかでコミュニケーションエラーが生じ、インシデントに繋がりがかねないことがある。学生は、観察した患者のバイタルサインの結果のみの報告で終わってしまい、学生自身のアセスメントを伝えない、もしくはアセスメントが不十分で伝えられない状況も見受けられる。臨地実習中に生じたインシデントの報告では、日常生活援助に関するものが大半を占めており、特に「転倒・転落」事故が発生しやすい（中澤他, 2015, 小泉他, 2007）。事前に、担当看護師への報告・連絡・相談ができていれば未然に防げる事故が多いのではないかと考えられる。インシデント・アクシデント防止のためにも、学生のアセスメント力の向上は欠かせない。

看護学科3年次に開講している「看護アセスメント学」では、シミュレータを活用した

シナリオシミュレーション演習を 2 コマ実施している。そして、講義・演習をとおして臨地実習で経験する術後患者の訪室場面の状況を設定し、患者の状態、変化がイメージできるように工夫を重ねている。1 回目の演習は、胃がん術後患者の訪室場面と設定し、2 回目の演習では胃がん術後患者の訪室による観察とその結果を、SBAR を用いてリーダー看護師に報告するという 2 段階の授業計画とした。SBAR とは、「S (Situation) 状況」、「B (Background) 背景」、「A (Assessment) 評価」、「R (Recommendation) 提案」で示され、緊急時に相手にいかに早く緊急性を伝え、適切な対処をしてもらうか、確実に意見を伝えるコミュニケーションエラー防止対策である(東京慈恵会医科大学付属病院医療安全管理部, 2012)。この方法は、緊急時だけでなく、情報を確実に、かつ効果的に伝達するための方法であり、状況・背景・考察・提案に分けて簡潔明瞭に伝達する方法である(織井, 2016)。SBAR の導入により、安全風土の改善、コミュニケーションエラーの減少、インシデントの減少等の効果が報告されている (Velji K, 2008, Randmaa M, 2014)。

本研究では、SBAR を用いたシミュレーション演習の学生の学びを明らかにし、今後の課題についても併せて検討することとする。

II. 目的

本研究の目的は、SBAR を用いたシミュレーション演習の学生の学びを明らかにすることである。

III. 研究方法

1. 研究協力者

平成 27 年度の看護アセスメント学を履修し、2 回目のシミュレーション演習に参加した看護学科 3 年生 40 名のうち、本研究への協力が同意が得られた学生とする。

2. 看護アセスメント学におけるシミュレーション演習の概要

1) 看護アセスメント学の位置づけ

看護アセスメント学は、3 年次第 3 クォーターに開講し、これまで学んだ講義や演習、実習から得た知識・技術を基に対象者の看護問題のアセスメント、診断、計画、実践に向けて看護を統合的に考える力を習得することを目的としている。15 コマのうち、2 コマをシミュレーション演習にあてている。

2) 演習の概要

(1) シミュレーション事例

事例は A さんの「術後 3 日目に訪室する場面」を想定したシナリオを用いた。A さんは、胃がんによる幽門側胃切除術を施行され、術後 3 日目、輸液ルートと腹腔ドレーン、硬膜外 PCA が挿入されており、疼痛のため離床ができないという設定とした。学生は、A さんの受け持ち看護師として訪室し、設定されたシミュレータを用いて観察、情報収集を行い、結果を SBAR に沿ってリーダー看護師に報告することとした。

(2) 演習目標

- ① 全身状態の観察、バイタルサインの測定とアセスメントができる
- ② 疼痛時の対処方法が分かる
- ③ 現在の問題点と今後予測されることを 15 分以内に判断し、リーダー看護師に報告することができる

の 3 点とした。

(3) 演習の流れ

下記の①～③を 1 クールとし、学生の役割分担を変更して 2 回通り実施した。

① ブリーフィング (導入)

教員が状況設定について具体的に説明を行う。事例を配布し、情報収集の時間を設けた。

② シミュレーション実施

1 グループ 6 ～ 7 名で編成したグループに分かれてシナリオに基づき演習を行った。学生の役割分担は、受け持ち看護師役 1 名、リーダー看護師役 1 名、観察役数名とした。教員はファシリテータとして学生の思考や行為を支援した。

シミュレーション終了後、「SBAR 記録用紙」に情報を整理した後、受け持ち看護師役がリーダー看護師役に、SBAR に沿って報告を行った。シミュレーション中の気づきや学びは適宜「演習記録」に記入してもらった。

③ デブリーフィングセッション (振り返り)

演習目標の達成状況や学び、感想についてグループ単位でディスカッションを行った。その後、その内容をグループごとに発表し、全体でディスカッションを行った後、最終的に「演習記録」に、個人で演習目標の達成状況と演習の感想を整理した。

3. データ収集方法

演習中に各学生に配布、記入後、演習後に提出された「SBAR 記録用紙」、演習中の気づきや学びを記入した「演習用紙」を用いる。同意が得られた学生のを区別してデータとする。

4. 分析方法

記述内容の分析を行う。提出された「SBAR 記録用紙」「演習用紙」からデータとなる部分を抽出する。内容を表している部分をコード化し、共通する意味を持つものをまとめてサブカテゴリーとし、さらに類似するサブカテゴリーをまとめてカテゴリーとして名称をつける。分析内容の妥当性を確保するために、共同研究者間で共通理解が得られるまでグループディスカッションを行う。

その後、演習目標とカテゴリーを照らし合わせ、学生の学びと到達状況を確認した。

5. 倫理的配慮

本研究では研究協力者と研究者が学生と教員という関係にあり、成績評価と結び付くと誤認されること及びそれによって研究協力への強制力が働くことも考えられる。そのため、研究への協力は自由意思によるものであること、成績評価とは無関係であること、研究協力に同意しない場合も成績やその後の学習に影響しないことを、文書、口頭にて説明し、同意書に署名を得て実施した。

岡山県立大学倫理委員会の承認を得て、実施した。

IV. 結果

研究協力者は、39 名であった。SBAR を用いたシミュレーション演習の学びに関する分析の結果、＜効率的な情報収集・アセスメント・報告＞、＜患者の状態・術後経過の理解＞、＜関連する情報・問題点の整理＞、＜重要な情報の選別＞、＜相手への分かりやすさを意識した伝え方＞、＜患者へのケアにつながる提案＞、＜相手への伝達の困難感＞、＜アセスメントの根拠の明確化＞の 8 カテゴリーが明らかとなった。

1. 各カテゴリーの意味

以下に、各カテゴリーについて説明する。各カテゴリーの関係性については、図 1 に示した。

1) ＜効率的な情報収集・アセスメント・報告＞

シミュレーション演習では、技術や知識の未熟さ、緊張感から、情報収集やアセスメント、報告を短時間で行うことは難しいと感じ、効率的に行う必要があることを学んでいた。

2) ＜患者の状態・術後経過の理解＞

学生は、患者の状態を十分に理解し、術後の経過や状態の変化を把握することがアセ

メントに影響するため重要であると学んでいた。

3) <関連する情報・問題点の整理>

学生は、系統的に情報を整理し、関連する情報をまとめて報告することや、報告する内容の順序性について考えることができ、その重要性について学んでいた。

4) <重要な情報の選別>

学生は、得られた多くの情報についてすべてを報告するのではなく、報告すべき必要な情報を整理し、選別を行う必要があることを学んでいた。

5) <相手への分かりやすさを意識した伝え方>

学生は、SBARを用いてリーダー看護師に報告する経験を通して、情報を伝える相手を意識することができていた。分かりやすさ、効率的に伝える必要性を認識し、内容については伝えなければいけないこと、正確さの重要性を学んでいた。

6) <患者へのケアにつながる提案>

学生は、実習では薬剤投与等の自分では実施できないことや判断ができないことについて、看護師に提案することでケアにつながる

ることを学んでいた。

7) <相手への伝達の困難感>

学生は、リーダー看護師への報告場面において、緊張してうまく伝えられなかったり、必要な情報を伝えられなかったりする経験を通して、相手への伝達が困難であると感じていた。

8) <アセスメントの根拠の明確化>

学生は、患者の状態をアセスメントし、提案を行う時には、なぜその提案をするのかという根拠、理由を述べるのが大切だと学んでいた。

2. 演習目標に対する学生の学び

1) 全身状態の観察、バイタルサインの測定とアセスメントができる

学生は患者から得られた多くの情報の中から<重要な情報の選別>、<関連する情報・問題点の整理>を行うこと、<アセスメントの根拠の明確化>の必要性を学んでいた。

2) 疼痛時の対処方法が分かる

学生は、疼痛のある患者に対して<患者の状態・術後経過の理解>に基づいて、必要な

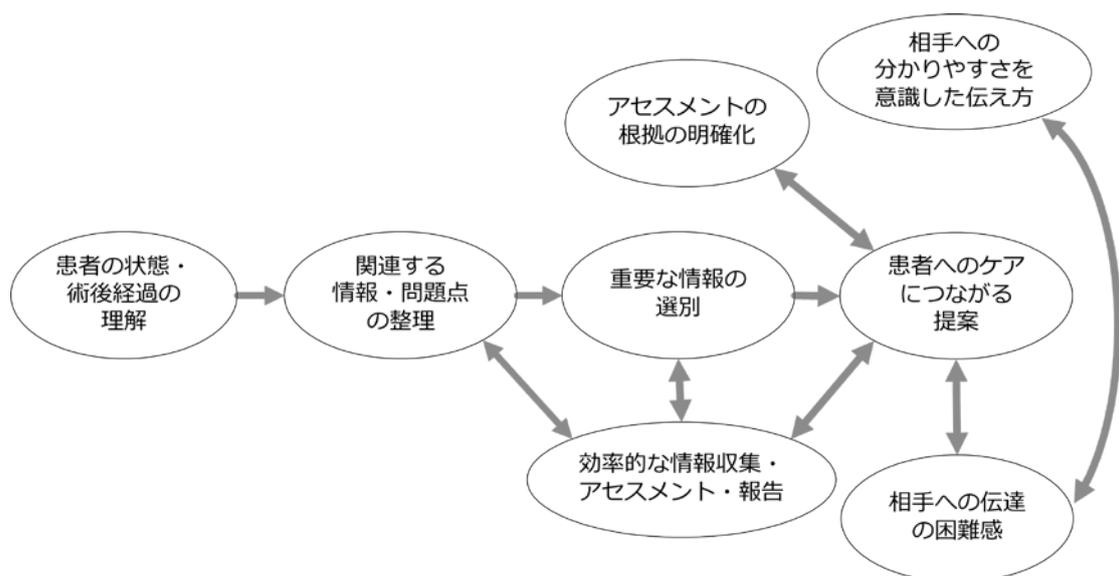


図1：SBARを用いた演習における学生の学びの構造

情報収集と疼痛への対処を考えることが重要であると認識していた。それによって＜患者へのケアにつながる提案＞を学び、患者から得た情報をケアに結びつけていく経験ができていた。

- 3) 現在の問題点と今後予測されることを15分以内に判断し、リーダー看護師に報告することができる

SBARを用いた報告までを一連の行為と設定することで、＜相手への分かりやすさを意識した伝え方＞を学び、相手の知りたい情報を意識して伝達する重要性が認識できていた。

V. 考察

1. SBARを演習に取り入れた学習効果

今回の演習のシナリオは、術後患者の訪室場面を設定した。学生は、最初の段階では、まずはどのような情報を得なければならないか、どのように情報を得るのかに苦慮する場面が多くみられた。技術や知識の未熟さ、緊張感から、情報収集やアセスメント、報告を短時間で行うことは難しいと感じ、＜効率的な情報収集・アセスメント・報告＞ができなければならないと学んでいた。そして、患者から得られた多くの情報の中から＜重要な情報の選別＞が必要であると学んでいた。1つのアセスメントを導き出すためには、＜関連する情報・問題点の整理＞によって系統的に情報を関連付け、根拠を裏付けなければならない、＜アセスメントの根拠の明確化＞の必要性を学んでいた。初学者は、情報がバラバラなまま一面的で浅い思考であるのに対して、エキスパートは柔軟で発展的、多様で広がりをもった志向ができると言われる(中西, 2010)。学生は、シミュレーションを通して、情報の広がりや統合、論理的思考が必要であると理解できたと考えられる。

シミュレーション演習中に使用する記録用紙では、状況、背景、評価、提案の順で情

報を整理することとした。訪室場面のシミュレーションを終えた後、記入時間を設け、その後リーダー看護師役に報告すると計画した。報告場面では、どの学生も緊張しており、バイタルサインの報告はできるものの、情報の不足、あいまいさ、順序性がないなどの状況がみられた。SBARによる報告という場面が加えられることによって、相手に報告、提案を行うため、自己の思考を言語化する必要が生じる。学生は、＜相手への分かりやすさを意識した伝え方＞を学び、相手の知りたい情報を意識して伝達する重要性が認識できていた。

臨地実習においては、学生が立案した看護計画を担当看護師に伝え、患者の状態の報告、看護師へのケアの相談など、さまざまな場面でコミュニケーションが求められ、提案力が必要となる。提案力を発揮する際に求められることは、相手の納得を得られる内容か否かが重要であると考えられる。提案の目的は、相手を説得することではなく、適切なリスクアセスメントに基づき、相手が納得できる論理的な伝え方をすることにより、情報の共有を図り、望ましい対応を実施すること、安全で良質な医療の提供である(斉藤他, 2016)。学生と看護師が相互に情報を共有し、患者に対して共通理解のもとにケアを提供することが望ましい。しかし、学生による看護師への報告やコミュニケーション場面では、情報の伝達力の未熟さや共通認識が不十分なため、コミュニケーションエラーが生じやすく、インシデントに繋がりがかねないことがある。重岡らは、成人看護学実習における学生のストレスや不安の要因として、申し送り、報告ができないことをあげている(重岡他, 2016)。実習前に、患者の訪室場面や看護師への報告場面を取り入れたシミュレーション演習を行うことによって、ストレスが軽減されるとともにレディネスを高めることができるのではないかと考えられる。しかし、十分に実

践力につながってはならず、さらなる演習の工夫が必要であると考えられる。

演習に用いた事例は、疼痛のある術後患者を設定したことで、学生は薬剤投与ができないため看護師に依頼する必要がある、その提案をためらう場面がみられた。しかし、振り返りによって疼痛コントロールの提案は可能であり、患者に対して＜患者の状態・術後経過の理解＞に基づいて、必要な情報収集と疼痛への対処を考えることが重要であると認識していた。これは、正確な患者の状態の把握が適切なリスクアセスメントにつながることを認識できたと言える。そして、得た情報から看護師へ鎮痛剤の使用を提案するという経験を通して、＜患者へのケアにつながる提案＞を学び、患者から得た情報をケアに結びつけていく経験ができていた。アセスメント力の基盤として、解釈を交えず、事実を事実として取り出す力、事実から意味を取り出し抽象化・概念化する力、起きている現象の構造（関係）を読み取る力を育成することが重要である（中西，2010）。シミュレーション演習を通して、アセスメント力、提案力の基盤を構築する一助になったと考えられる。

2. 今後の課題

学生は、SBAR を用いたシミュレーション演習を通して、演習目標に対して様々な学びを得ていることが明らかとなった。同じ設定の演習をグループで繰り返すことで学びが深まり、効果的であったと言える。しかし、演習による学びがすぐに実践力につながるとは言えず、今後は実践での活用について評価が必要である。

また、演習では4回のシミュレーション演習を実施しているが、すべての学生が看護師役として経験できるわけではない。経験できなかった学生に対する学習機会の提供を検討する必要がある。松江らは SBAR

シミュレーション演習では、情報伝達エラーを回避する能力の育成をめざし、学生が SBAR に分類した内容について、間違いがない、漏れがない、簡潔である、わかりやすいという条件に沿って判定、評価している（松江ら，2015）。本研究では、SBAR に分類した記述内容や学生の報告場面についての評価は行っていない。今後は、演習の評価方法を検討し、さらに効果的な演習プログラムの構築を目指したい。

VI. 結論

SBAR を用いたシミュレーション演習において、演習の各目標について学生は下記の学びがあった。

1. 「全身状態の観察、バイタルサインの測定とアセスメントができる」に対しては、患者から得られた多くの情報の中から＜重要な情報の選別＞、＜関連する情報・問題点の整理＞を行うこと、＜アセスメントの根拠の明確化＞の必要性を学んでいた。
2. 「疼痛時の対処方法が分かる」に対しては、疼痛のある患者に対して＜患者の状態・術後経過の理解＞に基づいて、必要な情報収集と疼痛への対処を考えることが重要であると認識していた。それによって＜患者へのケアにつながる提案＞を学び、患者から得た情報をケアに結びつけていく経験ができていた。
3. 「現在の問題点と今後予測されることを15分以内に判断し、リーダー看護師に報告することができる」に対しては、SBAR を用いた報告までを一連の行為と設定することで、＜相手への分かりやすさを意識した伝え方＞を学び、相手の知りたい情報を意識して伝える重要性が認識できていた。

引用文献

- 小泉麗, 鈴木明由実, 出野慶子, 大木伸子, 本間照子 (2007) 小児看護学実習における「ヒヤリハット」体験と学生が認識した要因の分析, 日本小児看護学会誌, 16(1): 17-24.
- 厚生労働省 (2007) 基礎看護教育の充実に関する検討会報告書,
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>
- 松江なるえ, 宮本千津子, 末永由理, 安藤瑞穂, 嶋澤奈津子 (2015) 看護学生における情報伝達エラーを回避する能力の育成を目指した SBAR 演習の試み, 東京医療保健大学紀要, 1: 43-51.
- 中澤洋子, 中村恵子, 高儀郁美 (2015) 成人看護学実習におけるインシデントの実態と教育上の課題, 北海道文教大学研究紀要, 39: 101-109.
- 中西純子 (2010) 初学者におけるアセスメントのピットフォールと回避のための教育, 看護診断, 15(1): 57-61.
- 織井優貴子 (2016) 看護シミュレーション教育基本テキスト 設計・実践・評価のプロセス, 日総研出版.
- Randmaa M, Mårtensson G, Leo Swenne C, Engström M (2014) SBAR improves communication and safety climate and decreases incident reports due to communication errors in an anaesthetic clinic: a prospective intervention study, *BMJ Open*, 4, e004268.
- 斉藤奈緒美, 石川雅彦 (2016) “SBAR”実施におけるアセスメント力・提案力の育成, 看護教育, 57(2): 152-157.
- 重岡秀子, 池本かづみ, 石崎文子, 片岡健 (2016) 成人看護学実習前・後における学生が感じるストレス感情と不安状態の実態, 健康科学と人間形成, 2(1): 17-26.
- 東京慈恵会医科大学付属病院医療安全管理部編 (2012) チームステップス日本版 医療安全—チームで取り組むヒューマンエラー対策, メジカルビュー社.
- Velji K, Baker GR, Fancott C, Andreoli A, Boaro N, Tardif G, Aimone E, Sinclair L (2008) Effectiveness of an Adapted SBAR Communication Tool for a Rehabilitation Setting, *Healthcare Quarterly*, 11 Special Issue: 72-79.

Students' learning through a simulated seminar using SBAR

Tomoko Inukai, Megumi Nagoshi

Department of Nursing Science, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama
Prefectural University

[Aims] To clarify students' learning through a simulated seminar using SBAR, and discuss the relevant issues. [Method] 1) Subjects: A total of 39 third-year nursing students. 2) Summary of the seminar: It was hypothesized that the situation was 3 days after surgery for stomach cancer, in which students collect information using a simulator and report the results to nurses using SBAR. 3) Seminar objectives: i. Being able to observe the systemic conditions of patients' and measure/assess their vital signs, ii. Being able to deal with pain, and iii. Being able to determine the current situation and predict potential events within 15 minutes, and make reports about them. 4) Data analysis: Qualitative analysis was performed based on reports regarding what students have noticed and learned during the seminar. [Results] The students' learning was divided into the following 8 categories: <efficient gathering/assessment/reporting of information>, <understanding of patients' conditions and postoperative courses>, <organizing relevant information and issues>, <sorting important information>, <handing over information in a manner so that one's counterpart understands it>, <making proposals that lead to patient care>, <having difficulty handing over information to one's counterpart>, and <clarifying the reasons for assessment>.

Keyword: SBAR, simulation, Nursing basic education, reporting, Medical safety